

平成30年度全国高校選抜（鳥取大会）審判員報告書

C3・C4 審判長

団体競技（男子：構成主任・実施主任、女子：派遣審判）

個人競技（男子：構成主任・実施主任、女子：派遣審判）

氏名（ 審判長 栗原 悠 ）

1. 採点上打ち合わせた事項

【審判長：栗原 副審判長：寺田】

- ・12月の全国講習会で変更になったところを中心にルールの確認をした。
- ・映像研修では個人8演技(各手具2演技づつ)、団体4演技採点をし、目線を合わせた。
- ・映像の選択にあたり、身体のレベルが高いもの、技のレベルが高いもの、芸術性が高いものなどわかりやすい映像を使用し、混乱なく進められるよう配慮した。
- ・ライン減点(例)演技中にスティックが壊れて飛んでいき場外した場合
→壊れた手具としてライン減点なし、ET-0.7とする
- ・高体連ルールの確認。高体連では今年度は新しい手具の規格は採用しないこととなっている。

【個人・団体D1審判：高橋】

- ・審判研修中に二人の審判間で判断に分かれることが多かったローテーション回数の見極め、団体では交換の追加基準の見極めが二人の間で見方が違っていることがあり重点的に事前に確認をするようにした。
- ・身体難度中に正しい手具技術が行われているかどうかの見極め、0.3の手具の技術的欠点を伴う実施の判断の仕方については審判長の先生ともよく確認ができた。
- ・各種大会で感じていた疑問点を事前に審判長と確認し、臨むことができた。研修の中で誤差の判断のいくつかのパターンを確認ができ、競技の中でもその目線を保ちながら審判するように臨むことができた。

【個人D3審判：詫間】

- ・投げのADに対して加点。大きな投げなのか、中くらいの投げなのかの目線の統一。同様に、受けに対しても高さの目線を合わせた。
- ・転がしADで、2部位の転がし（ボール・フープ）が満たされているか
- ・リボンADにて、図形の基準（4～5の輪・波）ができているか。
- ・リボンにて小さい・中くらいの投げなどの、裾が床に残りやすいものの判断
- ・ADの実施にあたり、基準とベースが整い満たしているか
- ・Rの実施にて、回転不足の判断と回転種類重複の有無併せて、受けながら回転するものについての基準のつき方の確認

【個人E1審判(フープ・クラブ)：藤綱】

- ・映像研修の中で採点しながら今大会の目線を合わせた。
- ・芸術では、ルールブックの内容は理解しても、数字に表わすことが難しいと、いつも感じている。芸術の減点項目それぞれに、どのラインで減点がおきるのか？ということは、個々の感覚に左右される為、研修の中では、演技を見て感じる事を言葉にし合うことで、採点も統一することができた。
- ・演技を作品として評価する為の具体的項目として、
 - ① 音楽(音)を使った身体の動きと手具操作であるかどうか
 - ② 一般的な動き、予想ができる動きにとどまらず、想像力発想力のある動きであるか、項目ごと、やや不足を感じるものが複数ある場合、全体的な評価ができるよう、ランキングにも意識し最終的な減点を出す

【個人E1審判(ボール・リボン)：山本】

- ・音楽のとらえ方を十分に考慮しコンセプトを重要視する。

- ・最終的に芸術としての正しい順位がつくようにする。

【個人E3 審判(フープ・クラブ)：平野】

- ・映像研修時、難度の誤差に対しての減点と移動に対しての減点の仕方が違うことから点数が離れたことがあった。そのため難度の誤差の見解をできるだけ統一し、皆が同じ目線になるよう心がけた。
- ・移動に対しての減点に関しては、明らかなミスによる移動なのかどうか…を見極めることを確認した。
- ・落下に対しての減点は、手具が選手の近くに落下した場合でも、手具を取り戻すまでの歩数をしっかり見極め、規則集通りに減点を入れること
- ・難度の誤差、移動、落下に加え、姿勢欠点や手具操作などをしっかり見て必要な減点をする

【個人E3 審判(ボール・リボン)：伊豆島】

- ・ルールに従い、正しく減点をいれ見逃しのないように注意する。
- ・まずは選手の評価をしつつ、そして偏りのある見方にならないよう研修での基準を忘れず採点に向かった。
- ・BDの誤差による減点について研修時には審判間で離れがあったが、再度映像を確認し統一の考えをもつようにした。
- ・実施ミスばかりにとらわれず、四肢の動きの美しさ、姿勢欠点があるか等を正しく見極めることを確認した。

【団体D3 審判：伊豆島】

- ・見逃しがないように、全体を把握しながらの採点を研修から心掛けた。
- ・RやCR, CRR, CRRRでの回転の重複がないか、回転が不足していないかの確認とタイミング・投げの大きさの見極め。
- ・CCがルールに則って行われているのか。
- ・実施ミスを見逃さずに、実際に正しく行われたものをカウントしていけるよう確認をした。

【団体E1 審判：山本】

- ・音楽の特徴、性質を表現できているかなど、評価の点数の幅が少ないながらも、作品の質をよく考慮すること
- ・シーズン初めの為、ミスが起きた時の減点をどの程度入れたらよいか、引きすぎないように全体を見て判断してゆくことをきめた。

【団体E3 審判：藤綱】

- ・映像研修では、全体を見ることができが、個々の動きが見にくい。その為、落下の見逃し、身体難度や移動の歩数に対しての0.1/0.3/0.5の減点の違いが、審判間での差異となった。
- ・選抜大会の時期やさらに技が増えているという事から、様々なミスのケースを予想して、その場合の減点を確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

【審判長：栗原、副審判長：寺田】

- ・今回から高体連ではDを1パネル、Eを2パネルでの審判構成であったが、非常にスムーズな審判業務であったと感じた。
- ・CJ減点でフロアに手具が残ったまま予備手具を使用し、0.5減点をいれた選手がいて残念だった。
- ・演技終了時の場外でライン減点を入れるべきか迷うことがあったが、手具が場外した後最後に最後のポーズをとってしまっていたので、最後の動きではないと判断し、ライン減点を入れた。
- ・リボンの結び目が出来た選手がいて、D1・D3、審判長、副審判長で確認したが、結び目が出来たと判断した難度が異なっていた為、0.1でも間違いがあってはいけないと判

断し、試合終了後にビデオで全員が目を確認し、正しい得点を出した。

【個人 D1 審判：高橋】

<身体難度>

- ・ 難度実施の際に手具操作のタイミングが完全に合わないというような実施が数件あった。
- ・ ローテーション難度が崩れてからの操作実施、ジャンプ助走時または着地と同時の操作実施、バランス終了後の操作実施など。
- ・ リボンでは手具の特性からか、手具技術減点-0.3を伴い身体難度ノーカウントというものも数件あった。身体に巻きつく、リボンの裾が1メートル以上床に残ってしまうなど、難度実施の際に正しい手具操作を行うということも徹底しなければならない。
- ・ ローテーションの軸に乗らず基本回転なく崩れてしまうもの、バランスの静止のない振り上げのような実施、このようなことからノーカウントの判断をしたことも少なからずあった。
- ・ 誤差の見方においてもルール通りで大きな誤差と判断されればノーカウントとした。
- ・ 同じ手具技術要素の繰り返しの実施は全体を通して、ほぼ無かった。

<ダンスステップコンビネーション>

- ・ 現行のルールにおける戦略上、ADの実施が増えたせいか演技内にダンスステップを数多く実施する構成が減っているように感じ、その一つまたは二つのダンスステップは以前に比べ見やすくはっきりと行われていたように思う
- ・ ノーカウントになるパターンとしてはADが含まれることにより静止してしまう(構成や振り付けとしての止まりではなく)、また手具技術減点が入ってしまう際に(移動減点、リボンの絡まりなど)ノーカウントとなることがあった。

<その他>

演技中にリボンの結び目が発生した件があったが、演技中どこの部分で結び始めたのか明確な判断ができなかった。そのため、競技終了後に審判長の先生とビデオ確認することとなった。

【個人 D3 審判：詫間】

<R>

- ・ 回転不足により、ノーカウントとなるケースが数件あった。
- ・ 縦軸での回転(シェネ・ブリンチック)が似通って見え、2回目がノーカウントとなることが若干件数あった。
- ・ 受けながらの回転において、3回転目がノーカウントとなり、受けに対しての追加の基準のみをカウントすることが多かった。また、受けながらのカウントはタイミングよく視野外にて回転に入っていたものは全てのカウントをした。

<AD>

- ・ 投げでのADを行う際、軌道の乱れによる移動があつての受けはノーカウント。
- ・ 受けでのADを不注意により身体との接触を伴つての実施はノーカウント。
- ・ 転がしのADにて、2部位の転がしの基準を満たしていない(フープ・ポール)もの、またリボンにて、図形の形状の基準ができていないものはノーカウントとした。
- ・ リボンの端が床に1メートルより長くのこり、カウントできないケースもあった。
- ・ 大きな投げ、大きな投げからの受けのADでは、身長+(身長×2)の高さの条件に届いてないものは低い投げとしてのカウントとなることが多かった。
- ・ 基準とベースがしっかり3つそろうものはカウントしていききました。

【個人 E1 審判(フープ・クラブ)：藤綱】

独自のオリジナリティーを感じる動きのある演技、一部みられる演技、全体的に欠ける演技。映像ではなく審判席からみると、選手のエネルギーも加わって、少しの差でも感じとることができる。不必要な停止＝減点に加えて、動きにひと工夫があることによってより印象に残る。

ただ、ミスがあり音にずれる・つながりが失われる等、単独的な減点が増えると作品の評価としては、同じような点数になってしまうことは多々あった。

演技中盤からずれていく選手も多く見られた。

ルールの特性として、芸術が置き去りになることもある。選手自身が演技に対してさらに意欲的に取り組める方法として、曲を理解しそこから発想したことを動きにつなげることも、楽しみの一つであって欲しいと感じた。

【個人 E1 審判(ボール・リボン)：山本】

- ・各項目での減点は違うものの、合計得点にすると皆似た点数になってしまった。
- ・演技終了時に音楽のリズムと動きのハーモニーが合わず、0.5 の減点を入れた選手がいた。
- ・両種目共に、音楽の特徴を理解しているのか、何を表現したいのかわからない作品もあった。
- ・また、構成が先走り、選手の持つ個性やエネルギーと合っていないようなものがあった。個人的な意見ではあるが、是非とも選手自身が音楽を理解し、美しく踊れる表現者を目指してほしいと思う。

【個人 E3 審判(フープ・クラブ)：平野】

- ・落下ミスが多い演技に対しての評価が割れたことがあったが、審判長・副審判長と演技の実施内容(減点内容)を確認した
- ・Dの上限がないため、ADを多く入れた演技が目立っていたが、全体的にまだ完成度は低く感じるように感じた。その為、ADの数に比例し全体的に移動や落下も多く、選手本来の実力をテクニカルで評価することが出来なかった。
- ・落下・移動以外では以下が多く見受けられた。
- ・ローテーションの踵の低さ
- ・難度のリング・鹿ジャンプ系の前足の引付けに対しての誤差が多くみられた
- ・バランス難度において、1秒の静止が見られない
- ・難度に誤差は無くても、大きさが無い
- ・演技のつながりの部分や難度中における姿勢(肩の上りやひざ、つま先等の緩み)
- ・手具の不正確な受けや、受けの際の肘のまがりも多くみられた
- ・クラブでは風車の手首の開きや、クラブの真ん中を保持している事が多い選手も見られた

【個人 E3(ボールリボン)：伊豆島】

- ・やはり実際の演技を目の当たりにすると、BDの誤差が0.1なのか0.3なのか迷う場面がでてくるが、多くの選手が自身のレベルにあった美しく実施できるBDを選択しており、0.5の誤差減点はほぼなかった。
- ・手具の減点については、受けの際の肘の曲がり、ボールの両手受け、不正確な保持、リボンの図形の乱れ、裾の残り、絡まりや結び目による中断等が主であった。
- ・R/ADを行う際の四肢の緩み、手具の不正確さが目立った。RやADが多く入る演技で技に夢中になり姿勢欠点・手具の減点があるとテクニカルの方では難度の加点以上に減点はいってしまうパターンもあった。

【団体 D1：高橋】

<交換難度>

- ・2手具の特性から、交換難度においての追加基準の見極めがとても難しいもの

であった。しかし、5人全員で追加の基準を正確に実施している場合のみ加点となるので、一名が実施していないことも多くあり、実際には受けの追加基準のカウントは少なかったように思う。一方上位チームでは投げの追加基準、交換の最中の追加基準、さらに受けの追加基準までしっかりとカウントが出来る実施が見えるので、一つずつの交換難度の点数が大きいものだった。演技中に交換難度はそれぞれ4、5個入っているためにその一つずつの価値の点差が積み重なると1点以上の差が出るようになった。審判が見極めの力を持つことはもちろんであるが、見やすく構成するという点もこの2手具の団体においては重要であると感じた。

<ダンスステップコンビネーション>

- ・ほとんどのチームで演技中にはっきりとわかりやすく構成され実施されていたように思う。そのため2人の審判間で意見が分かれることは少なかった。

<身体難度>

- ・個人と同じ目線で判断をした。ルール通り、5人の実施が中くらいの誤差におさまったものと判断できればカウントとした。
- ・どのチームもあまり変わりのない身体難度の選択であった。

<その他>

- ・連係なのか交換なのかわからない実施のものがあり（交換としての基準も満たしている実施）演技後に個数確認し、10個以上の難度実施があったということが数件あった。その際、二名で内容を改めて確認し、明確に交換と判断したものの方でカウントをするようにした。

【団体D3審判：伊豆島】

- ・回転の種類では、選手自身は異なるものを行っているつもりであっても、実際試合では同じものに見えてしまい、その技が全てノーカウントとなってしまうことがまだあるので、回転の種類にも多様性が必要と感じた。
- ・連係において、回転をした選手が受け取らないというのものが、ノーカウントとした。
- ・複数投げ時の投げの大きさは、中くらいか大きいものとなっているが、手以外・視野外を行うために投げが小さなものになってしまうことがあった。
- ・連係がつながっているところで、選手の関りが不足しているチームがあった。

【団体E1：山本】

- ・二人の点数が離れる事は少なかったが、アイディアのガイドの0.2の重みを痛感することとなった。
- ・作品はよいが選手の技術レベルが低くこなしかれていないなど、迷うところが一緒だったため、共通得点の決定はスムーズにいった。
- ・全体を通して作品の後半に音楽との不一致が多いように感じられた。
- ・未だに長い準備動作や不要な間、つなぎもあり、流れの美しさにかける箇所も多くみられた。しかしながら、選手、チームのエネルギーが音楽と一体になり、表現されたものはよく考慮し評価をしなければならないとも強く感じた。

【団体E3審判：藤綱】

- ・技術で評価すべき内容はひとつでないとはいえ、全体的にミスが多く、減点も大きいことから、実施力の差が得点の差となった。
- ・ミスによる移動であるのか、そうでないのかは見解が分かれるところであるが、明らかな移動は、隊形が乱れたりや動きのつなぎが途切れる等、他にも影響が出ていた。
- ・審判間では見方を統一して進める事ができたと感じる。

3. その他特記事項・意見・感想等

ルール変更により難度の上限がなくなったことで、構成には大きな差が出て

きたことを感じました。その為、個人・団体ともに、落下ミスが複数おこるケースも多くみられました。ミスをしてしまえば大きな減点に繋がるという怖さもあるので、自分の今の力量と演技構成をいかに合わせるかというバランスが必要ですが世界に置いて行かれないようスピード感をもって進んでいくことも選手にとって重要なことだと改めて感じました。今のルールは技を入れて練習して出来るようになればダイレクトに得点アップに繋がるというスポーツとしての側面を多く持っています。前向きに次に向けて改善して進んでいくという姿勢を持って欲しいと思います。この審判報告が多くの新体操関係者の皆様のお役にたてれば幸いです。

今大会に際し、長きに渡りご準備頂きました高体連・開催地の皆様には、心より御礼申し上げます。鳥取県の皆様は少ない人数での運営でしたが、それを感じさせない細かな配慮がなされた心温まる運営でした。審判員としてこの大会に参加させて頂けたことに改めて感謝の気持ちです。